

# 福祉施設オスペダレの音楽家からオペラ歌手への転身

— アドリアーナ・フェッラレーゼ・デル・ベネにみるキャリア形成の一例 —

室町 さやか

## The career change from a feminine musician of the Venetian welfare institution "Ospedale" to opera singer, in case of Adriana Ferrarese del Bene

Sayaka MUROMACHI

### Abstract

The purpose of this study is to present the career of Adriana Ferrarese del Bene and to discuss the musical environment of the *Ospedale dei Mendicanti* where Ferrarese studied music. Although Ferrarese is usually known as the first singer to perform the role of Fiordiligi in Mozart's *Così fan tutte*, this study focuses on her career before her arrival in Wien and, above all, on her interrelation with the musical activity of the *Mendicanti*.

Due to Mozart's great name, to his prominence and also to the intimate relationship between Ferrarese and Lorenzo Da Ponte, her career in Italy did not attract much interest till now. Nevertheless analysing the situation of the *Ospedale dei Mendicanti* at that time and investigating the scandal of "elope" in 1783, we can find in Ferrarese a musician who tried actively to establish her position among difficult circumstances.

This paper consists of four parts:

1) Preface 2) The early musical activity of the *Ospedale dei Mendicanti* and three women teachers of music (Marietta Giusti, Franceschina dal Basso, Cattarina da Udine) 3) The *Maestri del Coro* of the *Mendicanti* 4) The early career of Adriana Ferrarese

### Key-words

Ospedale dei Mendicanti, Adriana Ferrarese del Bene, Venice, woman and music,

### 1. はじめに

モーツァルトの『コジ・ファン・トゥッテ』においてフィオルディリージ役をはじめて歌った歌手として知られているアドリアーナ・フェッラレーゼ・デル・ベネ Adriana Ferrarese del Bene (1759-1803以降) はウィーンの他ロンドンやイタリア各地で活躍した女性歌手であり、台本作家ロレンツォ・ダ・ポンテの愛人としても知られているが、彼女の歌手としての最初の経歴がヴェネツィアの福祉施設オスペダレ・デイ・メンディカンティ Ospedale dei Mendicantiにおけるものであったことは、フェッラレーゼの存在を同時代の他の歌手たちとは異なる

キャリアを持った人物として西洋音楽史のなかで際立たせている。オスペダレとは中世からイタリア諸都市に設立されたキリスト教を母体とした福祉施設であり、ヴェネツィアのオスペダレはとくに女性のみで構成されたコーロ（音楽隊）を有して音楽活動を行っていたことで有名であった。フェッラレーゼが音楽を学んだオスペダレ・デイ・メンディカンティ（以下メンディカンティ）は貧困者、孤児、未亡人、病人、引退した労働者などを保護する大規模な福祉施設であったが、かれらもまた女性音楽隊を組織して礼拝や折々の行事で音楽を披露し、その評判は国内のみならず諸外国の有識者の興味

をも強く引き付けるものであった。1786年から1788年にかけてイタリアを旅したゲーテは、その著書『イタリア紀行』のなかでメンディカンティの音楽を聴いた時のことを次のように記録している。

地図を手にして変にわかりにくい通路を抜けて、私はメンディカンティの寺院まで辿りついた。ここには現在もとても評判のいい音楽学校がある。婦人たちが格子の中で聖樂を奏していたが、聴衆は会堂に一杯で、音楽は非常に美しく、声もまたすぐれていた<sup>(1)</sup>。

フェッラレーゼはこのメンディカンティにおいて音楽を学び、その才能を認められていくつかのオラトリオでソリストを務めるまでになったが、1783年懇意にしていた貴族アゴスティーノ・デル・ベネAgostino del Beneの息子ルイーダ・デル・ベネLuigi del Beneと駆け落ちという形で同施設から離れ、後にウィーンの宮廷でサリエリやモーツァルトのオペラで重用される歌手となった。本論では彼女が育ったメンディカンティの初期の歴史と音楽活動について概観し、フェッラレーゼが歌手になるに至った経緯を中心に論じている。福祉施設の音楽隊という特異な環境を出発点としたフェッラレーゼに焦点を当て、彼女が音楽を学んだ時期のメンディカンティの音楽環境を理解するとともに18世紀のヨーロッパに生きた女性のキャリア形成の一例を提示するのが本論の目的である。

## 2. 初期の音楽活動と三人の女性教師

すでに述べた通り、アドリアーナ・フェッラレーゼはヴェネツィアのオスペダレ・デイ・メンディカンティで教育を受けた。オスペダレとは、現代のイタリア語では「病院」を意味する言葉であるが、中世から18世紀にかけてイタリア諸都市で設立された福祉施設を指す語であり、元々は巡礼者のための宿として機能していた施設がその起源である。フェッラレーゼが活躍していた時代、ヴェネツィアにはメンディカンティの他にもピエタ、インクラベリ、オスペダレットなどのオスペダレ・マッジョーリと呼ばれる大規模なオスペダレがあり、

これら4つのオスペダレは女性のみで構成された音楽隊を有し、その演奏活動によって有名であった。

オスペダレ・デイ・メンディカンティの歴史はこれら4つのオスペダレ・マッジョーリのうちもっとも古く、12世紀にヴェネツィア本島に近い聖ラザロ島に設立されたハンセン氏病患者のための施設がその起源である<sup>(2)</sup>。ヴェネツィア政府は16世紀までに街を徘徊する物乞いに悩まされていたが、この問題を緩和することを目的としてかれらを収容するための福祉施設を設立することを決定した。当初は聖ラザロ島の施設を元に新たなオスペダレを建設する予定であったが、場所などの利便性が考慮されてヴェネツィア本島により大規模で一般的な福祉活動を行う施設の建設が計画されることとなった<sup>(3)</sup>。1600年1月17日後にオスペダレ・デイ・メンディカンティとなる新たな施設の運営は聖ラザロ島の施設の運営者たちに任せられ、理事会はただちに周辺の福祉施設や教会を合併して倉庫、祈祷所、数百の宿泊場所などを備えた施設の実現に着手し<sup>(4)</sup>、1601年8月8日には聖ラザロ、聖セバスティアノ、聖メリトーネ、そして40人の殉教者の聖遺物がメンディカンティ教会に移され、翌日には元首マリアーノ・グリマーニ(1595-1605)の臨席で最初のミサが挙げられている<sup>(5)</sup>。以来メンディカンティは物乞い、孤児、未亡人、病人、引退した労働者、年離れた貴族などのためにより広範囲な福祉を行い、18世紀には600人から900人を収容する大規模なオスペダレとして機能した<sup>(6)</sup>。

現在、メンディカンティの公的な記録が残された会議議事録notatorioは全七冊のうち1600年から1788年までの五冊が孤児院と教育団体Istituzioni di Ricovero e di Educazione(以下I.R.E.)の古文書館に、残りは国立ヴェネト古文書館Archivio di Stato di Venetoに保管されているが、これらの会議議事録のうち音楽活動に関する最初の記録は1604年2月27日にみられ、そこには「もっとも成長した娘たちの中から」8人を選んですでに礼拝で音楽を演奏を行っている4人に加えること、ただし演奏は施設外で行ってはならないと記されている<sup>(7)</sup>。その後の同年4月3日の記録では娘たちを四旬節の週のうち3日間オスペダレの終課の際に歌わせる旨が書かれてお

り<sup>(8)</sup>、メンディカンティの音楽活動が当初はあくまでも同施設内で行われる礼拝にのみ供されるものとして始まっていたことがわかる。1606年5月、1609年1月にも四旬節の終課に女性たちが歌う旨が記されており<sup>(9)</sup>、さらに5カ月後の1609年6月には彼女たちの演奏に対して20ドゥカート<sup>(10)</sup>の報酬が支払われ、1617年7月12日には終課のみならずその他の礼拝の時にも歌唱を続けることが賛成票10、反対票2で可決されている<sup>(11)</sup>。1618年12月27日理事会はコーロに対し、これまで歌唱のみで少なくとも必要の際には外部の音楽家によって演奏されていたと考えられるオルガンを教会と信徒会の承認の元で理事会が選んだ女性に演奏させるとしており<sup>(12)</sup>、これによってメンディカンティのコーロは隊員がオルガンで伴奏する女性合唱隊へと変貌した。当初はオルガンのみとされていた楽器も次第に増え、少なくとも1630年までに壊れたトロンボーンを買い替え、1639年には良質なヴァイオリンの購入を決定している<sup>(13)</sup>。

メンディカンティの音楽活動史において最大の転換期は1639年に訪れる。この年の5月22日、理事会はコーロに対して施設の娘たちからもっとも歌うこと、オルガンやその他の楽器を演奏することに秀でた者たちをえこひいきなしに抜擢し、日に2時間日常の業務を免除して音楽の勉強に専念させ、勉強の時間にその他の仕事を持ち込むことを禁止する旨を満場一致で可決している<sup>(14)</sup>。それまで演奏を行う女性たちを選ぶ際の基準は明記されていなかったのが「歌唱」「器楽演奏」という音楽能力に焦点を当てた審査基準が明確にされ、「えこひいきなしで」と釘を指すような語が用いられている。さらにオスベダーレ内の家事やレース編みや針仕事などの施設の収入源となるタスカtascaと呼ばれる仕事を音楽の勉強に専念させるために免除する旨が記されており、これらの決定はこれまで施設内でいわば内輪向けに行われてきた演奏活動をより高度なものへとし、寄付金や名声の獲得に向けた音楽活動への契機であった。すでにピエタ、オスベダレットではオスベダーレ外で活躍する音楽家が楽長Maestro di coroとして就任し、職業的な音楽活動に向けて動き出していたため、これらのオスベダーレの動きもメンディカンティの理事会をおおいに刺激したもの

と考えられる。同年7月3日、メンディカンティ初の楽長Musicoとして、ジョヴァンニ・ロヴェッタGiovanni Rovetta (1596-1668) が迎えられた<sup>(15)</sup>。

しかしながら、前述したように音楽活動の最初の記録は1605年であり、ロヴェッタが楽長に就任するまでには30年以上の年月を要している。メンディカンティにおける音楽活動の黎明期ともいえるこの時期にコーロの音楽を支えたのは、楽長の役職こそ与えられなかったものの理事会の承認を得て声楽や器楽をコーロの女性たちに教えていた地元の音楽家たちであった。とりわけ興味深いのは、最初期のコーロにおいてマリエッタ・ジュスティ Marietta Giusti (又はMarieta Giusti)、フランチェスキーナ・ダル・バッソFranceschina dal Basso、カッターリーナ・ダ・ウディネCattarina da Udineという名の三人の女性たちが音楽教師として雇われていることである。彼女たちはメンディカンティにおける最初の音楽教師であり、後にバルダッサレ・ガルツピBaldassare Galuppi (1706-1785) の元でその最盛期を迎えるコーロの初期を支えたのが無名の女性教師たちであったことは興味深い。無名であったために彼女たちがどのような人物であったかを知ることは困難ではあるが、メンディカンティの会議議事録に残る記録からおぼろげながらその輪郭を辿ることができる。

マリエッタ・ジュスティはオルガニストであるパオロ・ジュスティ Paolo Giusti (d. 1624) の娘である。バルデスの研究によると、父パオロは1588年から聖マルコ大聖堂のオルガニストを務めていた<sup>(16)</sup>。彼女の名前が最初に記録に現れるのは1618年6月10日のことであった。

聖マルコのオルガニストであるパオロ・ジュスティは、音楽に精励した彼の娘マリエッタ・ジュスティをオスベダーレに紹介した。前述の娘が彼女の意志または別の望みでオスベダーレを出る際には、彼女の父親は彼女がオスベダーレに留まっていた間すべての経費を払わなければならない。

賛成票10、反対票1<sup>(17)</sup>

この時点ではオスベダーレが彼女を音楽教師として

雇ったとは書かれてはいないが、少なくともジュスティが音楽の素養を備えていたことが認められ、おそらくは父親が音楽家であるという家庭環境からオスペダレに受け入れられる以前から音楽教育を受けていたと考えられる。1624年8月18日、同年8月24日の記録では、ジュスティがコーロの女性たちに音楽を教え、オルガンを演奏するために施設内に暮らしていることが記されており、報酬として年に12ドゥカートを受け取ることが決定されている<sup>(18)</sup>。

フランチェスキナ・ダル・バッソについては出身やオスペダレに来た経緯などは不明である。1620年5月25日の記録では理事会が彼女に音楽と歌唱を娘たちに教育する任務を委託し、彼女は週のうち3日間午前中礼拝のために外出する自由を許され、褒賞として食事と12ドゥカートの年俸を得ることが記されている<sup>(19)</sup>。カッターリーナ・ダ・ウディネは1934年の記録によると前述したパオロ・ジュスティの娘であり、マリエッタ・ジュスティの姉妹であった<sup>(20)</sup>。最初に1620年6月8日、コーロで歌い、娘たちに音楽を教えるために施設に入れるかどうか議論されたが、「間違いなく施設と食糧事情に負担をかける」という理由で否決され<sup>(21)</sup>、彼女がメンディカンティに受け入れられるのは数年後の1624年4月10日のことであった。その際の記録には彼女が年に12ドゥカートの報酬を受け取ること、現在の経済事情では気前よくこれを出すわけにはいかないので支払いは来たる5月1日からオスペダレの会計から支払われること、カッターリーナ・ダ・ウディネは娘たちを教え、その他すべての必要に応じて同施設に奉仕しなければいけない旨が16の賛成票をもって可決されている<sup>(22)</sup>。

これらの例から分かる通り、1600年代にメンディカンティに雇われた女性教師たちは基本的に施設内に起居し、報酬として年12ドゥカートを受け取っていた。1730年にソルフェージュ教師を雇うために用意された年俸が50ドゥカート<sup>(23)</sup>であったことを考えると少ない額ではあるが、食事など生活に必要な諸経費の一部を施設が負担していた可能性を考慮すると、生活の面倒を見ることと引き換えに音楽を教え、さらに報酬を貰っていたというのはそれほど悪い労働条件ではなかったといえる。ま

た、オルガンを女性に演奏させることですら会議で賛成が得られなければ実現しなかったことを考えれば、理事会がジュスティを曲がりなりにも音楽教師のひとりとして認め、報酬を支払っていた事実には、女性と音楽との関わりに対する同施設の考え方に1605年から1639年の間に明らかな変化が認められるのである。

### 3. メンディカンティの歴代楽長たち

フェッラレーゼが過ごした18世紀半ばのメンディカンティとその音楽活動を明らかにするには、まず音楽の最高責任者である楽長について論じる必要がある(表1)。

表1) オスペダレ・デイ・メンディカンティの歴代楽長

| Year of admission | name                                 |
|-------------------|--------------------------------------|
| 1639              | Giovanni Rovetta (1596-1668)         |
| 1642              | Natale Monferrato (c.1603-1685)      |
| 1676              | Giovanni Legrenzi (1626-1690)        |
| 1685              | Gian Domenico Partenio (c.1650-1701) |
| 1689              | Francesco Rossi (c.1650-c.1725)      |
| 1699              | Mario Martini (c.1650-1730)          |
| 1699              | Antonio Biffi (1666-1733)            |
| 1731              | Pietro Scarpari                      |
| 1732              | Giuseppe Saratelli (c.1680-1762)     |
| 1740              | Baldassare Galuppi (1706-1785)       |
| 1752              | Ferdinando Bertoni (1725-1813)       |

楽長には演奏の指導、リハーサルの指揮、コーロのメンバーの選抜など様々な仕事が課せられていたが、もっとも重要とされていたのはオスペダレに付属する教会で行われる礼拝で演奏するための音楽を作曲することであった。当初は施設内で小規模な合唱隊によって行われていた音楽活動も、18世紀になると寄付金や名声の獲得といったより具体的な目的を持つものへと変化していった。教会に多くの会衆を集め、寄付金を得るためには次から次へと目新しい曲を演奏し、人々の心を惹きつけることが必要であったのである。この時期になるとオスペダレの楽長は劇場や教会など、オスペダレ外部や時には外国でも名声を博する重要な作曲家であることが

ほとんどであった。オスペダレ・デイ・メンディカンティの歴代の楽長たちを概観すると、はじめに「ムジコmusico」と呼ばれたジョヴェンニ・ロヴェッタが挙げられる。すでにカルロ・フィッラーゴCarlo Fillago (c.1586-1644) が1639年4月18日に60ドゥカートで年俸で音楽教師として雇われていたが<sup>(24)</sup>、メンディカンティの音楽全体の責任者としてはじめて楽長の任に就いたのはロヴェッタであると考えられている。かれは1627年に聖マルコの副楽長vice-maestroとなり、1644年からは師であるモンテヴェルディの後をついで楽長の地位についた。メンディカンティの楽長であったのは1639年から42年の間であるが、ロヴェッタはこれに先立つ1635年から47年までオスペダレで楽長を務めており、うち3年間はふたつのオスペダレの楽長職を兼任していたことになる。彼は歌手であり、器楽奏者でもあり、作曲家でもあったが、オスペダレのために作曲してはいなかったと考えられている<sup>(25)</sup>。オスペダレ・デッラ・ピエタにおいても、積極的に作曲をしていた形跡があるのは、1658年に楽長に就任したローゼンミュラーからであり、ふたつのオスペダレの楽長を掛け持ちすることが可能であったということから、この時代のオスペダレの楽長の業務においては作曲は後の時代ほどには重要視されていなかったと考えられる。メンディカンティでは音楽家の給料を理事が負担する形になっていたが、1642年にはオスペダレの予算の中から支払われることが決定されている<sup>(26)</sup>。

次の楽長、ナターレ・モンフェッラート Natale Monferrato (c.1603-1685) はオスペダレ以外のヴェネツィアのあらゆる音楽シーンで精力的に活動する音楽家であり、1642年から年俸120ドゥカートで楽長として迎えられた<sup>(27)</sup>。生涯にわたって創作した作品の数は膨大であり、メンディカンティのために作曲した21のモテットが残っており<sup>(28)</sup>、理事会も彼の仕事ぶりに満足していたためか1674年2月には理事会の投票なしに続投が決定され<sup>(29)</sup>、30年以上の間楽長の地位に留まり続けることになる。彼の音楽には装飾が多用されており、この頃からすでにオスペダレ音楽では宗教的な厳粛さよりも聴衆の心を動かす華やかな表現の方が好まれていたことが分かる。メン

ディカンティを辞した後、モンフェッラートは1676年に聖マルコ大聖堂の楽長となった。1676年5月13日の記録には当時のメンディカンティにおける音楽教育についての記録が残されているが、そこからはコーロに選ばれた娘たちは3つのクラスに分けられ、最初のクラスは16歳まで、次のクラスにはその後5年間留まり、最後には演奏者として10年コーロに奉仕すること、演奏家となった者は代わりが見つかるまでは辞めてはならないことなどが記されており<sup>(30)</sup>、コーロの演奏家が長年にわたる研鑽を積みなければならなかったことから、その演奏に高い水準が求められていたことがわかる。

モンフェッラートが辞した後、ジョヴァンニ・レグレンツィ Giovanni Legrenzi (1626-1690)、ジュゼッペ・サラテッリ Giuseppe Saratelli (c.1680-1762) など、数代を経て新たに楽長として選ばれたのがバルダッサレ・ガルッピ Baldassare Galuppi (1706-1785) である。前楽長であったサラテッリはいまだ古めかしい教会音楽を守り続けている作曲家であった。オスペダレ間の競争に勝つためには、聴衆を惹き付けられる、魅力的で感興を起こさせるような作品を書ける作曲家が、ぜひとも必要であった。サラテッリは1740年に理事会で行われた投票の結果によって楽長の職を追われ<sup>(31)</sup>、次に白羽の矢が立ったのが生粋のヴェネツィア人であり、A.ロッチの薫陶を受けた当時33歳のガルッピであった。かれはすでにいくつかのオペラを発表してオペラ作曲家として歌劇の世界で頭角を現しており、メンディカンティの楽長としては最適であったと考えられる<sup>(32)</sup>。1740年5月、メンディカンティはマグダラのマリアの祝祭のための音楽をガルッピに依頼したが、この依頼には明らかに彼がメンディカンティの楽長としてふさわしいかどうかを見極める意図が存在していた。祝祭の当日である1740年7月22日、ガルッピ作曲のオラトリオ《聖マグダラのマリア》が演奏され、この上演の大成功を受けて8月の4日にガルッピは年俸250ドゥカートでメンディカンティの楽長に任命された<sup>(33)</sup>。メンディカンティの音楽活動は楽長ガルッピの元、ひとつの頂点を迎えている。楽長ガルッピはコーロの改革に取り組み、フィーリエ・デル・コーロの人数

は増強され、声楽のための教師が新たに雇われた。ガルツピはメンディカンティに数多くの楽曲を提供し<sup>(34)</sup>、オラトリオの上演も積極的に行われた。しかし理事会はガルツピの就任からほぼ一年後の1741年8月、次のような手紙を受け取ることになる。

私はずっと、音楽を愛する複数の英国人から彼らの音楽活動に参加しないかと頼まれていました。したがって、私はこの名誉ある仕事にとりかかるために、かの国に行くためのお許しを得ることを懇願しなければなりません。<sup>(35)</sup>

「音楽を愛する英国人」というのは、ロンドンのキングス劇場の支配人のことであり、彼は自身のオペラ興業のために英国に渡ることを希望していた。手紙はさらに続き、ガルツピが前年度にコーロのために31以上もの作品を書いたこと、自分の不在時にも演奏できるように新たな作品を残していくこと、留守の間のコーロの訓練は声楽教師のアントニオ・バルビエーリ Antonio Barbieri に任せておけば間違いはないこと、手紙を書いた8月の末には出発すること、遅くとも来年の6月には帰ってくる事が述べられている。この時、ガルツピが添付した作品リストには、前年度に書いた作品として16のモテット、13のSalve、ふたつの晩課、自分が不在時のための作品として4つのモテット、ふたつのSalve、そしてConfitebor、Laudate、Alma redemptoreがそれぞれひとつずつ記されている<sup>(36)</sup>。ガルツピの要請を受けて行われた理事会の投票の内訳は「賛成10」「棄権14」であった。続けて行われた2回目の投票では、「賛成8」「棄権16」という内訳になった<sup>(37)</sup>。彼らに降りかかった問題は、若手の人気作曲家を擁した音楽機関として避けては通れないものであった。イタリア国内にいれば劇場のシーズン・オフの季節にヴェネツィアに戻り、オスペダレのために活動することも容易だろうが、できれば楽長はヴェネツィアにいて常日頃からコーロを指揮し、作曲にあたって欲しいというのが理事会の意図であった。しかしながらガルツピの旅行を無理矢理押し留めでもすれば、彼がオスペダレでの職を辞めてしまう可能性もあ

り、「棄権」票を入れた理事たちの戸惑いを読みとることができる。議事録にはこの時の議題は「未解決」と記されているが、けっきょくガルツピはロンドンへと旅立ち、理事会が優秀な楽長を手放すことになるよりは、自由に活動させた方が良いと判断したと推測できる。またこの判断には長きに渡ってピエタとつかず離れずの関係を保ち続け、多くの作品を提供していたヴィヴァルディの存在も、理事たちに鷹揚な態度をとらせる一因となったことが考えられる。国際的な人気作曲家となったガルツピは長期間ヴェネツィアから離れることもしばしばであったが、1752年までメンディカンティの楽長の座に留まり続け、1762年には聖マルコ大聖堂の楽長に就任し、同年にインクラビリの楽長を兼任し、さらには1765年から68年までサンクトペテルブルクの宮廷楽長を務めた後に1785年にヴェネツィアで没している。

ガルツピの後を継ぎ、メンディカンティの最後の楽長となったのがフェルディナンド・ベルトーニFerdinando Bertoni (1725-1813) である。プレーシャ近郊のサロで生まれ、ボローニャでマルティーニに学んだ後1745年にヴェネツィアに移り住んだ。サン・モイゼ教会のオルガニストの地位を得、同じ年に最初のオペラを、翌46年には最初のオラトリオを上演している。彼は1747年以前からインクラビリで働き始め、1748年にはメンディカンティでガルツピの助手となった<sup>(38)</sup>。同年ウィーンに赴くためオスペダレを不在にしたガルツピが後を任せたのが、このベルトーニである。1752年、理事会はベルトーニに対し3日黙とうの祝祭のための新たな音楽の作曲とコーロの指導を依頼した。これはかつてガルツピに対して行われたのと同様、若き作曲家がメンディカンティの楽長としてふさわしいかどうかを試すための依頼であった。この上演の成功でもって、ベルトーニは同年4月19日に250ドゥカートの子給でメンディカンティの楽長に就任した<sup>(39)</sup>。

18世紀のヴェネツィアは経済的に衰退し、福祉活動を援助してきた貴族たちの没落にもなってオスペダレもまた経済的に困難な状況から免れることはできなかった。このような状況下にもかかわらずベルトーニは精力的にみずからの職務を遂行し、メンディカンティのコー

口は盛んに音楽活動を行った。彼は生涯に渡って膨大な数の作品を書き、なかでもオラトリオの数は注目に値するもので、1785年までに62もの彼の手によるオラトリオが、メンディカンティで上演されているのである<sup>(40)</sup>。1777年7月以降、同施設は音楽教師たちに給料を支払うことができず、ベルトーニはメンディカンティを去らなければならなかったが<sup>(41)</sup>、理事会は音楽活動を継続することを決定し、ヴェネツィアから離れて諸外国に活躍の場を移したベルトーニも帰国の際には新たな楽曲を同施設に提供し、良好な関係を続けていた<sup>(42)</sup>。1779年3月4日にメンディカンティに受け入れられたアドリアーナ・フェッラレーゼが過ごしたのは、このような時代であったのである。

#### 4. アドリアーナ・フェッラレーゼ

アドリアーナ・フェッラレーゼは1759年、フリウリ州のヴァルヴァゾーネに生まれた。彼女の祖父フランチェスコ・マリア・フェッラレーゼはヴェネツィア人であったが、貴族の娘であったアドリアーナ・ブラッテオロと結婚した後はウディネに居住し、その息子ジョヴァンニ・バッティスタがヴァルヴァゾーネのルイーザ・バルディと結婚して生まれた娘がアドリアーナである<sup>(43)</sup>。1778年、フェッラレーゼはヴェネツィアに赴き、翌年3月4日にオスペダレ・デイ・メンディカンティに受け入れられている。おそらくこれはコーロに欠員が出た際、コーロが新しい確実な才能を補充するために受け入れる12歳以上の大人の女性 *adulta*<sup>(44)</sup> としてコーロに入隊することを許可されたものであった<sup>(45)</sup>。フェッラレーゼは1780年の三日黙想の祝祭で上演されたジャコモ・アヴァンツィーニ Giacomo Avanzini のオラトリオ《シーザーの死 *De morte Sissaræ*》でデビューし、その後も1781年に《サムソン *Samson*》、《バルタザール *Balthassar*》、1782年には《セデシア *Sedecias*》、《ファラオの夢 *Somnium Pharaonis*》、《解放されたベトリア *Bethulia liberata*》などのオラトリオに出演した<sup>(46)</sup>、オスペダレの音楽活動においてオラトリオという音楽ジャンルはもっとも規模が大きく祝祭的な性格の強いものであり、コーロに入ったばかりのフェッラレーゼがこ

れにひんばんに参加していたことは、彼女の歌手としての能力を理事会が高く評価していたということにほかならない。このような背景を踏まえると、1783年1月8日に彼女が貴族の息子であるルイーダ・デル・ベネと施設から逃げ出した事件はメンディカンティにとって非常に衝撃的なものであったことが推測できる。

水曜日の夜7時、オスペダレ・デイ・メンディカンティの娘二人が逃亡した。ひとりにはフェッラレーゼ、中の上程度に歌う、もうひとりにはオルガニストである。彼女たちはふだん教皇領事のアゴスティーノ・デル・ベネ氏の屋敷に通っていたが、彼の息子が前者に夢中になり、逃亡において結ばれるためにこの事件に行き着いた。かれはおよそ150ゼッキーニと少々のシャツを持ち出している。娘たちは彼女たちの荷物すべてを携え、かれらはフリウリへ向かったと言われている<sup>(47)</sup>。

記録からもわかるように、フェッラレーゼと逃げ出したもうひとりの女性、ビアンカ・サッケッティ Bianca Sacchetti は、音楽の演奏のためにアゴスティーノ・デル・ベネの屋敷に通っていた。アゴスティーノの息子ルイーダとフェッラレーゼが恋中であることが発覚した際、父親は息子を遠方の軍隊に入れることを計画したが、その前にふたりはフェッラレーゼの伴奏者であったサッケッティとともに逃げ出してしまったのである<sup>(48)</sup>。

この事件を受けて、メンディカンティはただちに誘拐の被害届を提出し、一行は金曜の朝にポスタ・デイ・ポルトグリアロのオステリアで発見された<sup>(49)</sup>。サッケッティはメンディカンティに連れ戻され<sup>(50)</sup>、フェッラレーゼとルイーダ・デル・ベネはインクラベリと関わりの深いヴェネツィア貴族であるジョヴァネッリ家に保護され、1783年5月に正式に結婚することとなる。おそらくルイーダの父親であるアゴスティーノ・デル・ベネはこの結婚に賛成ではなかったが、いわば世論に押される形で二人の結婚を認めて適当な年金を与え、夫婦をペーザロに居住させたのである<sup>(51)</sup>。この逃亡について、フェッラレーゼ自身は次のように述べている。

私アドリアーナ・フェッラレーゼは、判事に対してルイー  
ジ・デル・ベーネに誘惑され、機嫌を取られたことにつ  
いての罪の赦免を切に願っている。かれはおよそ一年と  
一月前より環境が整い次第私と結婚すると約束していた。  
私はしばしば彼の父親の屋敷へ行き、父親はいつも私に  
私が出世することのできる場所である劇場へ行くことを  
勧めており、もし彼が20歳以上若ければ一緒に行くのに  
と言っていた。私がさらに一年待てば彼は私に旅費とし  
て300ゼッキニーを与えてすぐに恰好をつけるようにして  
くれると言った。私はこの計画に対し、もし私の結婚を  
お手伝い頂ければ喜んで行くのですが、そうは言っ  
ても私が見つけれられた時にこのように同伴者もなく一人  
では世間体を整えることができないと答えた。私の提言に  
対し彼は、私は馬鹿げている、劇場の女は偏見などない  
し、既婚でない女性はさらに楽しむことができると言っ

た。私はそれには答えず話題を変えた<sup>(52)</sup>。

この証言からもわかるように、彼女に日常的にオペ  
ラ歌手への道を示唆していたのはルイーゴの父アゴス  
ティーノであった。フェッラレーゼは逃亡の際に衣類の  
他に彼女の私的なレパートリーであったオペラの楽譜を  
持ち出しており<sup>(53)</sup>、この事実と上記の証言から、この逃  
亡の動機のひとつにオペラ劇場への強い渴望が存在して  
いたことが読み取れる。これらの背景には、当時のヴェ  
ネツィアを取り巻く状況が間接的な原因となっていたこ  
とが考えられる。ベルトーニが辞し、楽長不在となった  
後もオスペダーレ・デイ・メンディカンティは数多くの  
オラトリオを上演して活発な音楽活動を続けており、た  
えば1781年の四旬節には以下のようなプログラムで演  
奏が行われている（表2）。

表2) 1781年四旬節におけるメンディカンティのプログラム<sup>(54)</sup>

| Data          | Title                                       | Composer                |
|---------------|---|-------------------------|
| 1781 March 2  | Dialogo Sacro: Canticorum Sponsa e Miserere | F. Bertoni              |
| 1781 March 4  | Oratorio: Bethulia liberata                 | F. Alessandri           |
| 1781 March 9  | Stabat Mater, Pange Lingua                  | G.B.Pergolesi, anonimus |
| 1781 March 11 | Oratorio: De Morte Sifarae                  | G.Avanzini              |
| 1781 March 16 | Dialogo Sacro: Jonathas e Miserere          | F. Berton               |
| 1781 March 18 | Oratorio: Mors Athaliae                     | F. Berton               |
| 1781 March 19 | Oratorio: Poenitentia David                 | F. Berton               |
| 1781 March 23 | Stabat Mater, Pange Lingua                  | anonimus                |
| 1781 March 25 | Oratorio: Bethulia liberata                 | F. Alessandri           |
| 1781 March 30 | Dialogo Sacro: Canticorum Sponsa e Miserere | F. Bertoni              |

しかしながらヴェネツィアの経済は衰退し、相次ぐ戦  
争の影響によって共和国の疲弊は明らかであった。じっ  
さい、1797年からは長きにわたる外国によるヴェネツィ  
ア支配が始まり、1700年代末からはメンディカンティに  
おける音楽活動の記録は途絶え、1807年には同施設の歴  
史も幕を閉じてしまうのである<sup>(55)</sup>。このような状況下で、  
その決断にアゴスティーノ・デル・ベーネが影響してい  
たとしても、フェッラレーゼが自分の未来をオスペダー  
レではなく世俗のオペラ劇場の中に見出していたことは

十分に考えられる。オスペダーレはあくまでも教会を母  
体とした福祉施設であり、結婚してオスペダーレを出た  
後に職業演奏家となったマッダレーナ・ロンバルディー  
ニ・シルメンMaddalena Lombardini Sirmen (1745-1818)  
などの例もあるが、オスペダーレは施設に所属する女性  
音楽家たちが世俗のオペラ劇場に出演することを良しと  
せず、同施設にいる限り当時のフェッラレーゼがオペラ  
歌手となる見込みは非常に少なかったといえる。以上  
の理由から、この逃亡はルイーゴ・デル・ベーネとの

駆け落ちというよりもむしろひとりの女性が自分の将来のために踏み出した職業音楽としての第一歩であると位置づけることができ、事件のほとぼりも冷めやらぬ翌1784年春にフィレンツェのベルゴラ劇場に出演した事実もこの推測を裏付けている<sup>(56)</sup>。同じ年にトリノでふたつのコンサートを演奏し、翌年にはロンドンのキングス劇場でケルビーニの《ディミトリオ Demetrio》に出演、1786年まで8つのオペラに出演した。しかしながらフェッラレーゼのこれらの活躍は、「夫であるルイージが妻を劇場に売った」という理由でヴェネツィア司法官の注意を引くこととなった。法王はすでにフェッラレーゼを教皇領の劇場では歌わせないようにとの通達を出していたが、舅であるアゴスティーノ・デル・ペーネは同様の通達を出すようヴェネツィア共和国に求め、そのためフェッラレーゼは1791年1月のアゴスティーノの死までヴェネツィア内で歌うことはできなかった<sup>(57)</sup>。アゴスティーノのこの行動は、当時オペラ劇場で名声を勝ち得た歌手であっても劇場の歌手という職業が貴族の対面を傷つけるものとして考えられていたことを示している。

1788年10月13日、ウィーンに渡ったフェッラレーゼはブルク劇場において《ディアナの木 L'arbore di Diana》のタイトルロールでデビューする。作曲はヴィチェンテ・マルティン・イ・ソレル Vicente Martín y Soler (1754-1806)、台本作者は後にモーツァルト・オペラの台本作者として知られるロレンツォ・ダ・ポンテ Lorenzo da Ponte (1749-1838) であり、彼はフェッラレーゼについて次のように書き残している。

私の不幸は美しいという偉大な長所を持たないある歌手と出会ったことである。彼女は最初その歌で私を喜ばせ、私に好意を抱いていることを示し、最後に私は恋に落ちた。彼女の声は甘美であり、その新たな手法は素晴らしく人の心の琴線に触れた。彼女は非常に優美な姿をしているというわけでも最高の女優というわけでもなかったが、ふたつの美しい目があり愛らしい口があった<sup>(58)</sup>。

フェッラレーゼはオペラ・ブッフアに必要とされる演技力に欠けるところがあり、モーツァルトが彼女に与

えた最高音がa<sup>2</sup>であることから音域もそれほど広くはなかったが、低音から高音、高音から低音への跳躍が得意でそのドラマティックな歌唱については評価されていたと考えられる<sup>(59)</sup>。じっさい彼女はウィーン滞在中の1788年10月から1791年3月までの間にモーツァルト、サリエリ、パイジェッロなどの12のオペラ作品で歌っている。ウィーンを離れたフェッラレーゼはワルシャワで数多くのオペラに出演し、1793年以降はイタリアに戻って音楽活動を行った。彼女の晩年についての記録は見つかっておらず、1836年以降はその足跡は途絶えてしまっている<sup>(60)</sup>。

序文でも述べたように、フェッラレーゼはまず《コシ・ファン・トゥッテ》のフィオルディリージ役を創唱した歌手として知られている。音楽史におけるモーツァルトの名があまりに偉大であったおかげで彼の作品に関わったフェッラレーゼの名もまた歴史に残ることができたといえるが、同時にフェッラレーゼ自身、とくに彼女がオペラ歌手としてのキャリアを確立するまでのメンディカンティ時代についてはこれまであまり論じられてはこなかった。ダ・ポンテとの関係とモーツァルトがあまり高く彼女を評価していなかったこと<sup>(61)</sup>、そしてプリマドンナとしての経歴ばかりが突出し、フェッラレーゼと彼女が音楽家として最初の活動を行ったオスペダレ・デイ・メンディカンティとの関わりについては興味を向けられてこなかったのではないだろうか。しかしながら、当時のメンディカンティの状況とフェッラレーゼが決行した「逃亡」について詳細に論じれば、そこには困難な状況から自分のキャリアを確立しようとした一人の音楽家の姿が見えてくるのである。

## 注

- (1) Goethe, J.W. 1816 *Italienische Reise* ed. Christoph Michel, Hans-Georg Dewitz, Frankfurt am Main, p.79, 1993.
- (2) Luciano, Zanaldi *Notizie preliminari per una storia documentata dell'Ospedale civile di Venezia*, Venezia, p. 28, 1950.
- (3) Gillio, Giuseppe Pier *L'attività musicale negli ospedali*

- di Venezia nel settecento*, Firenze, p9, 2006.
- (4) op.cit, p9.
- (5) Baldauf-Berdes, Jane *Women Musicians of Venice*, New York, revised edition, p.61, 1996.
- (6) Talbot, Michael *The sacred vocal music of Antonio vivaldisacred vocal music*, Firenze, p.94, 1995.
- (7) I-Vire, MEN B.1, c.177. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.163, 1978.
- (8) op.cit, c.177. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.164, 1978.
- (9) I-Vire, MEN A.5, c.54, 67. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.175, 1978.
- (10) op.cit, 68. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.175, 1978.
- (11) I-Vire, MEN A.1, 92. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.175, 1978.
- (12) op.cit, c.109. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.176, 1978.
- (13) Constable, M.V. The Venetian 'Figlie del coro': their Environment and Archivement, *Music and Letters* 63, p.190, 1982.
- (14) I-Vire, MEN, A1, c.187. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.177, 1978.
- (15) Gillio, Giuseppe Pier *L'attività musicale negli ospedali di Venezia nel settecento*, Firenze, p.388, 2006.
- (16) Baldauf-Berdes, Jane *Women Musicians of Venice*, New York, revised edition, p.110, 1996.
- (17) I-Vire, MEN, A.1, 98. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.175, 1978.
- (18) op.cit, c.130. B.2, p.295. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.176, 167, 1978.
- (19) op.cit, p.1010. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.176, 1978.
- (20) I-Vire, MEN, B.1, p.110. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.161, 1978.
- (21) op.cit, c.173. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.165, 1978.
- (22) I-Vire, MEN, A.1, c.128. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.176, 1978.
- (23) I-Vire, MEN, B.2, p.1010. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.172, 1978.
- (24) op.cit, p.296. transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.167, 1978.
- (25) Arnold, Denis "Music at the *Ospedali*" *Journal of the Royal Musical Association* 113(2), p.157, 1998.
- (26) Baldauf-Berdes, Jane *Women Musicians of Venice: Musical Foundations, 1525-1855 review editions*, London: Oxford p.162, 1993.
- (27) I-Vire, MEN, B.1, c.113, transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.162, 1978.
- (28) Arnold, Denis "Music at the *Ospedali*" *Journal of the Royal Musical Association* 113(2), pp.157-158, 1998.
- (29) I-Vire, MEN, B.1, c.113, transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.162, 1978.
- (30) op.cit, c.175, transcr. in Ellero, Giuseppe, *Arte e Musica all'Ospedaletto*, Venezia, p.166, 1978.
- (31) Arnold, Denis "Music at the Mendicanti in the eighteenth century" *Music and Letters* 65, p.346, 1984.
- (32) A op.cit, p.347.
- (33) Gillio, Giuseppe Pier *L'attività musicale negli ospedali di Venezia nel settecento*, Firenze, p.405, 2006.
- (34) 1741年8月にガルツピが理事会に提出した作品リストには、前年度に書いた作品として16モテット、13のSalve、ふたつの晩課、自分が不在時のための作品として4つのモテット、ふたつのSalve、そしてConfitebor、Laudate、Alma redemptoreがそれぞれひとつずつ記されている。Arnold, Denis "Music at the Mendicanti in the eighteenth century" *Music and Letters* 65, p.348, 1984.
- (35) Arnold, Denis "Music at the Mendicanti in the eighteenth century" *Music and Letters* 65, p.347, 1984.
- (36) op.cit, p.348.
- (37) op.cit, p.348.
- (38) Baldauf-Berdes, Jane *Women Musicians of Venice: Musical Foundations, 1525-1855 review editions*, London: Oxford p.135, 1993.
- (39) Gillio, Giuseppe Pier, *L'attività musicale negli ospedali*

- di Venezia nel settecento*, Firenze, p.415, 2006.
- (40) Arnold, Denis and Elsie *The Oratorio in Venice*, London: Royal Musical Association, pp.89-93, 1986.
- (41) Gillio, Giuseppe Pier *L'attività musicale negli ospedali di Venezia nel settecento*, Firenze, pp.431-2, 2006.
- (42) op.cit, p.434.
- (43) フェッラレーゼの洗礼記録は1759年7月20日であった。Lorenzo Nassimbeni, Paganini, Rpossini e la Ferrarese, Udine, p.62, 1999.
- (44) Gillio, Giuseppe Pier *L'attività musicale negli ospedali di Venezia nel settecento*, Firenze, p.130, 2006.
- (45) 大人の女性たちadulteの受け入れはメンディカンティ、インクラービリ、オスバダレットでのみ実施され、ピエタでは行われなかった。ピエタは孤児を専門に受け入れる施設であり、施設に暮らす人数が多かったために外部から《adulte》を受け入れる必要がなかったのである。
- (46) Gillio, Giuseppe Pier *L'attività musicale negli ospedali di Venezia nel settecento*, Firenze, p.435, 2006.
- (47) Lorenzo Nassimbeni, Paganini, Rpossini e la Ferrarese, Udine, p.63, 1999.
- (48) Gillio, Giuseppe Pier *L'attività musicale negli ospedali di Venezia nel settecento*, Firenze, p.148, 2006.
- (49) op.cit, p.148.
- (50) その後許されて同年、フランチェスコ・ピアンキのオラトリオ《アブラハムの犠牲》でデビューしている。Gillio, Giuseppe Pier *L'attività musicale negli ospedali di Venezia nel settecento*, Firenze, p.148, 2006.
- (51) Lorenzo Nassimbeni, Paganini, Rpossini e la Ferrarese, Udine, p.65, 1999.
- (52) Vas, PSO, b.80. transcr. in illio, Giuseppe Pier *L'attività musicale negli ospedali di Venezia nel settecento*, Firenze, CD d.106, 2006.
- (53) Gillio, Giuseppe Pier *L'attività musicale negli ospedali di Venezia nel settecento*, Firenze, p.148, 2006.
- (54) Arnold, Denis "Music at the Mendicanti in the eighteenth century" *Music and Letters* 65, pp.354-355, 1984.
- (55) Gillio, Giuseppe Pier *L'attività musicale negli ospedali di Venezia nel settecento*, Firenze, p.148, 2006.
- (56) op.cit, p.148.
- (57) Lorenzo Nassimbeni, Paganini, Rpossini e la Ferrarese, Udine, p.65, 1999.
- (58) Da ponte, Lorenzo *Memorie* ed. Cesare Pagnini, Milano, p.135, 1960.
- (59) Gidwitz, Lewy, Mozart's Fiordiligi: Adriana Ferrarese del Bene *Cambridge Opera Journal*, vol.8, no.3, pp.208-210, 1996.
- (60) Lorenzo Nassimbeni, Paganini, Rpossini e la Ferrarese, Udine, p.68, 1999.
- (61) 1789年4月16日の手紙「プリマドンナのアレグランドイは、フェッラレーゼ嬢よりずっとよかったです。——とはいっても、大したもんじゃないけど。——」海老沢敏, 高橋英郎訳モーツァルト書簡全集VI, 白水社, p.503, 2001.

